



TITLE:

宇宙を観る, 人生を観る : 卷頭隨筆

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 宇宙を観る, 人生を観る : 卷頭隨筆. 天界 1939, 19(222): 353-355

ISSUE DATE:

1939-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167884>

RIGHT:



第222號 (第 19 卷)

(昭和14年) 10 月 號

巻頭

## 宇宙を觀る、人生を觀る

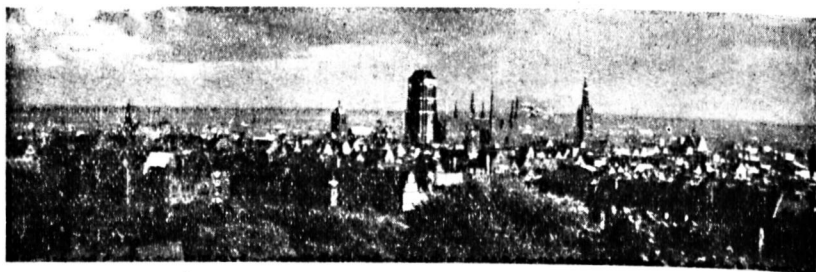
隨筆

山 本 一 清

天文の小さい“窓”から世の中を眺めるのも、吾々の一つの特権か(?)——  
ダンチヒ市のドイツへの併合問題で、歐州の風雲は激しい。吾々天文家から見れば、ダンチヒは昔しヘベリウスが活動した所であり、又、其の近郊のフラウエンブルグ町はコペルニクスの住んでゐた所である。今は此のあたりに大きな天文臺は無い。只、少しく東へ行けば、東プロイセンの首都ケニグスベルヒ市には有名な大學があり、こゝでは、カントや、ベセルの如き碩學が哲學を講じ、宇宙を測量した所である。このあたりの一帯が、今や再び戦亂の巷になつてしまつた。(今から25年前、この地方は、歐洲大戰の初期に於いて、帝政ロシア軍に蹂躪されやうとし、危ふくドイツ軍によつて食ひ止められた所であつて、かの大會戰の地として有名なタンネンベルヒ村といふのは、フラウエンブルグ町の南方約100キロメートルの所にある。)ドイツ人が新興文化の魁として今も尚ほ自國の學術史上の誇りとしてゐるアマチュア天文家ヘベリウスは西暦1611年1月28日にダンチヒ市で生れたが、實は、當時この市はポーランド國の一部であつた。ヘベリウスの名は Hevel 又は Höwelcke と言ひ、ドイツ語の Hügelchen 即ち小山といふ意味の名である。元名は明らかにポーランド語である。しかし、當時の學界は尚ほラテン語の全盛時代であつたから、ヘベリウスは自分の名を、學者らしく Hevelius と書いたりして、それで内外一般に知られてゐたものらしい、ヘベリウスは若い頃オランダのライデン大學で法律を學び、次で父の業を繼いで農業に従事したが、其の後、天文趣味に熱中し、生れ故郷ダンチヒで、1641年に一私立天文臺を建て、當時として誠に優秀な空中望遠鏡や、象限儀を設備し、夫人を助手として、日夜の天體觀測を勵んだも

のである。夫婦協同で天文観測をやつた人として天文學史上に最初に記録されてゐるのは此の夫婦である。ヘベリウスは月面の觀察をして、1647年には *Selenographia* (月面學) を著し、今日の“月面學”の創始者となつた。

次ぎに、又、ヘベリウスは象限儀で、星の子午線観測を勤勉に實施した結果、遂に總計1564ケの恒星の目録を作製したが、之れは1843年になつて英國の F. Bailey 氏が經めて、ロイヤル天文學會 *Memoirs* 第13卷に發表した。又、ヘベリウスは太陽黒點の観測をなし、四ケの彗星を發見し、尙ほ彗星が太陽のまはりに拋物線形の軌道を畫くことを創意した。彼れの彗星観測や意見は“*Prodromus cometicus*” (1665年) 及び“*Cometographia*” (1668年) といふ二つの著書に發表されてゐる。又、土星の形や、輪の観測については“*De natura Saturni*” といふ書を1656年に發表し、又、彼れの天文観測器械に關する記述は“*Machina coelestis*” といふ二冊の著書となつて、1673年乃至1679年に現はれた。ヘベリウスは1687年1月28日即ち第76回の誕生日の日にダンチヒで死んだ。

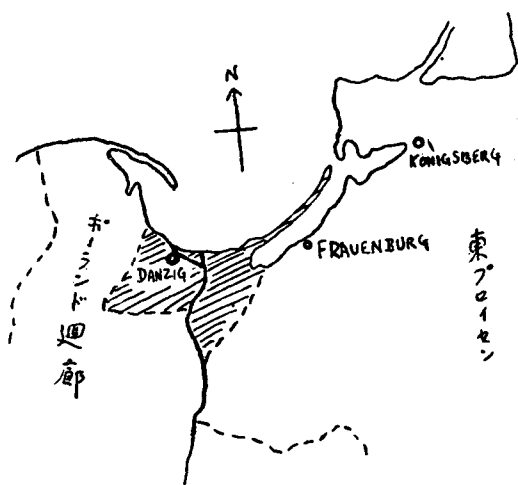


ダンチヒの市街

別頁に記した如く、このダンチヒ市で去る8月7日から11日まで、A. G. 天文協會は第33回總會を開いた。自分は會員であるけれど、内外多用のため此の總會に今回は出席し得なかつたが、昨今の如き國際政局の騒々しい際、このダンチヒ市に天文學者から世界各國から幾百名も集まつて、天體宇宙上の學理や観測結果を發表したことを、想像して見るだけでも、興味深いことである。

次ぎに、フラウエンブルグ町はコペルニクが1512年から1543年までカテドラルの主任僧として居住した所である。コペルニクの本名は Nikolai Koppernigk であるが、之れも後には例のラテン名への心酔により Nikolaus Copernicus といふ風に書くことが普通であつた。彼も、やはり、ポーランド人で、トルン市

に生れ、クラカウで大學教育を受け、それから長くイタリアへ遊學したのであるが、1497年に、24歳にして故國フラウエンブルグ寺院の僧たるの任命を受け、前記の如く1512年から此の任地に居住した。フラウエンブルグに居る間が、彼れの天文研究の全盛時代であつて、觀測も、研究も殆んど



皆此所で行つたのであるが、しかし、大著 *De Revolutionibus Orbium Coelestium* の大意は、1507年頃、彼れがイタリアから歸國して、未だ Heilsberg に滞在してゐた頃に大略完成し、フラウエンブルグでは之れを検證するための、仕上げの研究時代であつたといふ。

コペルニクの *De Revolutionibus* といふ大著は、1543年彼れが其の死の床に横はりつゝ、恰も出来上つて來た印刷本を見たといふのは有名な話である。此の書は、勿論、衆知の如く、地動説を主張した最初の權威ある書物であるが、1873年、ポランドのトルン市に於いて、コペルニク生誕400年記念として新版が印刷され、發行されたが、後1879年には C. L. Menzzer のドイツ語譯が亦トルンから出版された。——ところが、今1939年になつて、ドイツのライプチヒ天文臺の J. Hopmann 博士の斡旋で、再び上記の Menzzer のドイツ譯が再版され、(前號340頁に初版の如く書いたのは誤り) ホンの數日前に自分の手に入つたのは、奇縁であると言つて好からう。(1939年9月1日、獨波開戰の報を開きつゝ)

### “日 と 星”

日と星社の機關誌に「日と星」“The Sun and the Stars”があるが、之は天文の雜誌ではなく、實は Sun は太陽、the Stars は米國を象徵した在米同胞及第二世の爲の讀物雜誌である。東京から出版され、定價50仙。